

世界を旅する日本人大学生のアイデンティティの（再）構築

—カンボジア・スタディツアーにおける経験の事例から—

橋 本 卓*

(Re) constructing Identity of Japanese University Students Traveling Abroad:
A Case on Experiences through Cambodia Study Tour.

Suguru Hashimoto*

キーワード：スタディツアー、実践共同体、アイデンティティ、異文化理解、国際理解教育

Keywords : study tour, communities of practice, identity, cross-cultural understanding,
education for international understanding

1. はじめに：

現在、日本では旅行代理店の海外ボランティア、教育機関の海外体験学習（フィールドワーク）、そして NGO が主催するスタディツアーなど通常の観光旅行と異なる形態の旅行が注目されている（藤原・栗本，2014）。

その中でも本稿で取り上げる「スタディツアー」であるが、学問的定義ははっきりされていないものの、市原（2004）を参考にすると、NGO や学校などによって企画された世界の社会の実情を観ることを目的とした旅や訪問国での人々と交流することで自分の価値観を見直す旅であると言える。簡単に言い換えれば、文字通り学ぶことを主な目的とした旅のことである。実際に昨今のスタディツアーでは、教育、福祉、平和、産業、医療、歴史、自然、文化など多種多様なテーマがあり、現地での活動を通して、そのテーマに関する未知の事柄を発見し、学ぶということが行われている（市原，2004）。

筆者は2017年の2月15日から約2週間、日本人大学生が企画したカンボジア・スタディツアーに参加した。筆者は教職員でありながら、学生と同じツアー参加者という立場で、カンボジアへ赴き、さまざまな活動に従事した。さて、この「学びの旅」は私たちに具体的に何をもたらしたのだろうか。本稿では、参与観察のデータに基づき、ツアー参加者、特に日本人大学生がこのスタディツアーを通して得た経験とそれによる大学生の成長を明らかにしていく。

2. 概念的枠組み：

(1) 実践共同体とスタディツアー：

まず、今回のスタディツアーの経験を検討する上で Wenger (1998, 2010) が説いた「実践共同体 (communities of practice)」を取り上げる。Wenger (1998, 2010) はある人がある集団や組織などに参入し、他者と共に行動する中で知識や技術や概念などを学ぶ場を実践共同体と説明している。そして、その概念の中で学習をもたらす要素の一つとして共同体に入る際に直面する「境界 (boundary)」を紹介している。

Wenger (2010) によると、境界は今まで所属している共同体から新たな共同体に参入する際に他者との相

* 明星大学人文学部国際コミュニケーション学科特任講師
School of Humanities Department of International Studies Meisei University

互行為を通して感じる歴史、レパトリリー（知識や技術や概念）、コミュニケーション方式、能力などにおけるずれから生じると言う。そして、Wenger (2010)はこの境界により他者との関係の断絶や誤解や摩擦が生じると指摘しているが、同時にそこには学習の可能性が隠れており、新たな考え方や意味の解釈をもたらすと主張している (pp.125-126)。さらに、そのような状況で社会的実践が繰り返されることにより、今までの「自己」と交渉が行われ、自分がどのような人になるのかを認識する、つまりアイデンティティが構築されると説明している (p.131)。

ここで Wenger (1998, 2010) が提唱した実践共同体とスタディツアーとの関連性について簡単に述べる。市原 (2004) はスタディツアーの主な学びとして、現地の環境を観察したり、その現地の人と交流したりすることにより、その土地の歴史や生活に関する知識を得ること、そしてその現地の人の考え方や価値観を共有・共感することを挙げている (pp.100-110)。また、その過程の中で自分の住む地域や国と訪問した地域や国との差異を認め、相対的に再考し、最終的にそれらの体験が参加者の考え方、生活の仕方、将来の進路などの変容をもたらすと指摘している (市原, 2004, pp.114-136)。この観点は人見 (2015) のタイにおけるスタディツアーでも見られ、現地での生活体験や現地の人との交流により、日本での生活や文化を再認識したり、将来の国際社会への貢献を意識し始めたりする大学生の姿が報告されている。このように、スタディツアーでの現地の共同体への参入とその経験による参加者の自己の変容は Wenger (1998, 2010) が提唱する学習理論と重なる点が多いと言える。そこで、今回のスタディツアーにおける日本人大学生の経験を Wenger (1998, 2010) の理論を参考にして分析していくことにする。

3. 研究方法：

今回、2017年2月に行われたカンボジア・スタディツアーを通して、日本人大学生が体験した社会的活動やそれによる大学生の成長を調査するためにフィールドワーク、主に参与観察を行なった。筆者もツアーに参加する大学生と渡航前の日本での計画・準備から、カンボジア訪問まで共にさまざまな活動に取り組みながら、その活動の様子、特に現場と行為者とその行為者の言動に注目しながら観察した (DeWalt & DeWalt, 2011)。その観察から得たデータはフィールドノートや録音や写真及びビデオ撮影で記録した。

データを分析する際には、今回のツアーでのさまざまな社会的活動から見える日本人大学生の言動の意味や感情の動きを明らかにしていく。特に本稿では日本人大学生がカンボジアで過ごす中でどのように境界 (Wenger, 1998, 2010) に直面し、どのように葛藤し、実践するのかその過程を詳しく描写し、その経験が日本人大学生に与える影響を分析する。

4. カンボジア・スタディツアーの概要：

今回のツアーにおける現地での日本人大学生の経験を報告する前に、このツアーの概要を述べる。このツアーは主に海外でボランティアなど様々な活動をする明星大学の学生団体「BUKAS」に所属している大学生によって企画されたものである。ツアー実施までの流れだが、まずツアーを提案するリーダーの大学生が説明会でツアーの概要を説明し、参加希望者を集める。それから、その希望者と一緒に滞在先や活動内容などを決め、計画や準備を行い、ツアーを実施する。

今回のカンボジア・スタディツアーに参加する日本人大学生は4名であった。参加した大学生の詳細だが、3名が明星大学の学生、1名が他大学の学生であった。4名とも当時大学1年生であり、専攻は3名が教育系で、1名が情報系であった。渡航経験についてだが、3名はアジアや欧米への渡航経験があり、1名は今までなく、今回のツアーが初めての渡航であった。なお、カンボジアへの渡航は4名とも初めてであった。また、4名とも教員を目指しており、今回のツアーのテーマも「教育の大切さを考える」であった。準備期間中のミーティングではツアーの参加目的として「現地の子どもの実情の理解」「現地の教育の実情の理解」「現地の人

との交流」「異文化理解」「観光」などが挙げられていた。

ツアーの実施期間は2017年2月15日から3月2日までであり、主な滞在先はプノンベンとシェムリアップであった。活動内容は現地の教育施設での交流活動やボランティア、村やスラムへの訪問や観光などを通してカンボジアの教育や歴史や文化を学ぶことであった。今回のスタディツアーの全体のスケジュールは以下の表1・2の通りである。

表1. スケジュール(ツアー準備期間)：

時 期	主な活動内容
2016年12月	ツアー説明会、メンバー募集
2017年1月～2月(中旬)	メンバー決定 滞在先での活動の計画・準備

※ミーティングは2016年12月～2017年1月は週数回実施。2017年2月よりほぼ毎日実施。

表2. スケジュール(ツアー実施期間)：

日 付	主な活動内容
2月15日(水)	・移動：日本 成田国際空港 → 中国 香港国際空港 ※空港泊
2月16日(木)	・移動：中国 香港国際空港 → カンボジア プノンベン国際空港 ・観光：マーケット散策
2月17日(金)	・観光：トゥールスレーン博物館・キリングフィールドなど ・移動：プノンベン → シェムリアップ※バス車中泊
2月18日(土)	・移動：プノンベン → シェムリアップ ・小学校訪問 ◇交流活動(トランポリン・折り紙など) ◇学校建設
2月19日(日)	・自由行動
2月20日(月)	・観光：アンコール遺跡群
2月21日(火)	・クラウ村訪問 ◇村のフリースクールでの交流活動：歌遊び 日本文化紹介(けん玉作り・節分) ◇村ステイ ※クラウ村で一泊
2月22日(水)	・クラウ村訪問 ◇クラウ村見学 ・バイヨン中学校訪問 ◇校内見学&授業見学 ◇交流活動：歌遊び・二人三脚
2月23日(木)	・自由行動
2月24日(金)	・教員養成校訪問 ◇校内見学&授業見学
2月25日(土)	・観光：プレアビヒア寺院遺跡
2月26日(日)	・自由行動
2月27日(月)	・コムルー村訪問 ◇施設(保育園・図書館)見学 ◇子どもたちのための給食作り ◇農業体験 ◇日本語教室見学 ◇講座受講(カンボジアの歴史・生活について) ・スラム訪問 ◇講座受講(カンボジアのスラムについて) ◇スラム見学 ◇日本語学校訪問：校内見学&授業見学 交流活動：日本語によるコミュニケーション活動
2月28日(火)	・移動：シェムリアップ → プノンベン ※筆者は所用のため、カンボジアからタイへ移動。
3月1日(水)	・観光 ・移動：カンボジア プノンベン国際空港 → 日本 成田国際空港 ※機内泊
3月2日(木)	・移動：カンボジア プノンベン国際空港 → 日本 成田国際空港

※2月16日～17日、28日、3月1日は主にプノンベンに滞在。2月18日～27日は主にシェムリアップに滞在。

※2月18日は他大学の学生団体が主催するボランティア活動に参加。

※2月21日～22日・24日は現地のNGOのスタッフ、27日は現地の旅行代理店のスタッフによる案内あり。

※経験や感想の共有や予定の確認のため、ほぼ毎日ミーティングを実施。

このように、今回のツアーに参加した大学生は多種多様な経験を準備段階から得ていることがわかる。したがって、準備段階から実施までの経験を一つ一つ詳細に描写するのが適当であろう。ただ、今回の報告では紙幅の都合上、カンボジアでの経験、特に「多言語使用」及び「カンボジアの子どもたちとの出会い」を取り上げる。これらの経験を紹介しながら、現地の共同体に参入する中で境界 (Wenger, 1998, 2010) に直面し、葛藤を実感しながら、実践や意味の解釈をしていく大学生の姿を報告する。

5. カンボジア・スタディツアーにおける日本人大学生の経験：

(1) 多言語使用への意識：

人が集まる共同体に参入する際、一般的に行われる相互行為の一つはコミュニケーションである。今回のような海外スタディツアーの場合、現地の人と会話をする際、現地で使われる言語を選択し、それを利用する。もちろん、ツアー参加者である大学生もカンボジアの現地の人と会話をし、目的を達成するために、現地で使われる言語とその使用を意識していた。次のデータはミーティングで大学生がプノンペンに到着した日に行ったマーケット散策での経験を報告していた時の言葉である。

データ1：

正直やばいと思った。え、まじ？でも少し慣れた。周りに知らない人や言葉を話してるので不安で怖かった。ダンジョンに迷い込んだ感じ…最後の方は慣れてきた。時計を買った。ねぎった。知らない人に話しかけるのに、英文を考えて話して伝わったのが嬉しかった。(学生1)

ミーティング(2月16日)より

データ2：

英語が話せた。海外の人と会話ができたとすることに新鮮。ほんとうはクメール語で話したいけど。(学生1)

もっとクメール語を使えるようになりたい。英語を使ってしまった。(学生2)

ミーティング(2月16日)より

上記のデータ1では学生1がマーケットを訪問した際、現地の共同体における人々の様子や使用されていた言語との出会いから、不安や怖さを感じていたことが見える。しかし、学生1は既習の英語の知識を利用し、現地の人との会話やマーケットでの買い物などの社会的活動を実現させ、カンボジアの人々の共同体に参入するメンバーシップを獲得していったと言える。

また、データ2からわかるように、大学生はカンボジアの言語、クメール語も重要なコミュニケーションツールであると意識していた。ただ、クメール語は学生にとって、ほぼ未習の言語であり、カンボジアの人々の共同体に参入する際に意思疎通の断絶や擦れ違いを生み出すもの、すなわち境界 (Wenger, 1998, 2010) だったと言える。このことから、クメール語の重要性と使用実現可能性との間で葛藤が生まれていたと推察できる。

とはいえ、Wenger (1998, 2010) が述べているように、このような葛藤や緊張は新たな学習や実践をもたらすこともある。次のデータはミーティングで学生2がクメール語の使用について語った言葉である。

データ3：

トランポリンで教える担当をして、子どもにふれることができてよかった… (クメール語での) 数の数え方を勉強できてよかった。(学生2)

本で調べて片言のクメール語でも通じたのがよかった。（学生2）

ミーティング（2月18日）より

学生2は現地の小学校でトランポリン活動を行った際、現地の子どもたちが安全に楽しく飛べるように補助をしていた。その際、学生2は飛ぶ回数を現地の子どもたちと一緒にクメール語で数えていた。また、ツアー参加者全員で現地のレストランで食事をした際に、学生2はクメール語の本で会計の希望を伝える表現を調べ、実際にクメール語で店員に伝え、その表現が通じた結果に喜んでいて、これらのデータから、クメール語を学び、それを使用することを心がけると意識の変容が窺える。また、クメール語が伝わった達成感、そしてカンボジアの人々の共同体に参入するメンバーシップの獲得をより深く感じていたことがわかる。

このように、英語やクメール語は日本人大学生とカンボジアの人々との交流を支えていた。他方、これらの言語だけでなく、大学生の母語である日本語もカンボジアの人々とのコミュニケーションを可能にしていた。大学生はカンボジアでレストランの接客、販売、ガイド、そして物乞いなどさまざまな目的を果たすために日本語を使用する人々に出会っていた。クラウ村を訪問した際に会った日本語とクメール語の通訳やガイドをする NGO スタッフのカンボジア人もその内の一人である。

大学生はそのスタッフと打ち合わせや雑談をする際、日本語を使用していた。もちろん、日本語の使用は大学生にとって母語であるため、ほとんど問題なく行われると思われた。ただ、NGOのスタッフとの日本語による会話の中で、日本人とカンボジア人との日本語能力にずれが表れたため、時に摩擦が生じていた。次のデータは大学生がクラウ村のフリースクールで子どもたちに節分を紹介する活動について NGO のスタッフと打ち合わせしている場面である。

データ4:

学生3: 節分の説明をします。（教案を見せながら）えっと、こういう説明をするんですけど…

※通訳のカンボジア人がS3に教案の漢字が読めないことを告げる。

学生3: やっぱ、ミスった。漢字だったのミスった。

学生4: いや（学生3の名前）がそれを簡単な日本語でいえば。

学生3: そうだね。俺が簡単な日本語で言えばいいんだ。節分は…（省略）

クラウ村のフリースクールでの活動（2月21日）より

最初、学生3は日本語で書かれた教案を見せながら、節分を説明しようとしていた。ところが、学生3は NGO のスタッフが教案の漢字が理解できないことを知り、困惑していた。そこで学生4が学生3に相手を理解できるような日本語に調整し、口頭で説明するようにアドバイスしていた。学生3はそれを聞き、自分の日本語の語彙や話すスピードをコントロールしながら、節分の説明を再度始めた。この経験から大学生は日本語であれ、国際的に使われるものだと認識し、さらに境界（Wenger, 1998, 2010）となり得る日本語母語話者と日本語非母語話者の日本語の相違を実感したと言える。また、意味伝達のための日本語の再調整は大学生に日本語を改めて意識させ、日本語母語話者としての自己の変容に繋がったと推察できる。

以上のように日本人大学生は現地の人と会話をするためにさまざまな言語を使用していた。最初は現地で行われる言語により、困惑し、葛藤する一面も窺えた。だが、それぞれの言語を意識し、使用することでカンボジアの人々と意思疎通し、繋がることを実現していた。結果として、このような経験で大学生は文化の一つである言語の価値を尊重する精神も育まれたのでないだろうか。

ながらとかいう子も結構見て(中略)本当に貧しいのかなのって、なんか貧しいことは貧しいんだろうけどなんか物乞いって、来たらあげちゃう人もいるじゃん(中略)だからなんかそれで意外とお金貰って、でもなんか演じればもらえるからていうふうにおもっちゃって物乞いってなくなんないのかなって思ったから、物乞いにあげるあげないのは自由だけど、その子の将来のためにその人の将来のためになるのかならないのかってあんまりこうなんか私たちの目じゃ判断できないっていうか難しいなあって思いました。お金をあげるかあげないかという問題も難しい。正解はわからないけどすごい考える、考えなきゃいけないことだなって思う。(学生4)

帰国後の振り返りミーティング(3月13日)より

物乞いという場面は現在の日本ではあまり頻繁に遭遇することがないため、大学生の目にはカンボジアの人々の共同体における境界(Wenger, 1998, 2010)の一つとして映っていたのではないだろうか。データ7の学生4の言葉から、物乞いへの遭遇は大学生に日本人大学生が考える「貧しさ」と現地の人々、特に子どもたちの様子から見られる「貧しさ」のずれを示し、「貧しさ」とは何なのかという価値観の再考をもたらしたと言える。そして、物乞いという行為をどのように解釈していけばいいのか葛藤しながらも、そのことに目を向け続けることの重要性を気付かせる機会をもたらしたと考えられる。

6. まとめ：

本稿では2017年2月中旬から3月初旬にかけて行われたカンボジア・スタディツアーで大学生が得た経験をいくつか取り上げた。大学生は現地の共同体の中で使われる言語を意識しながら、それぞれの言語を使用し、買い物、情報や意思の伝達、人間関係の構築などさまざまな目的を達成し、その共同体へのメンバーシップを獲得していた。他方では、現地の人々、特に子どもたちとの交流を重ね、子どもたちの笑顔を見ながら、関係を築くと同時に、労働や物乞いに従事する子どもたちと出会う中で「貧しさ」などの価値観を再解釈していた。

今回のように、スタディツアーでは参加者が訪問先でさまざまな場所を巡り、ある社会的活動に取り組み、その中で今まで所属している共同体と現地の共同体に存在する言語・知識・方法・概念などの差異(や共通点)を発見し、時に戸惑い、実践や意味の解釈を繰り返していくと考えられる。したがって、スタディツアーは参加者に多文化的な社会と相互に関わりあって生きるための術を伝え、その社会で生きる自分の姿を想像させるきっかけをもたらす旅と言えるのではないだろうか。

本稿は今回のカンボジア・スタディツアーの一部の経験を取り上げただけであり、ツアーの準備から実施後までの長期間にわたる日本人大学生の経験を詳細に検討しなかった。次回はスタディツアーのプログラム全体を詳細に分析し、ツアーに励む大学生の経験とそれによる大学生の成長、特にアイデンティティの(再)構築の過程を調査したいと思う。

参考文献

市原芳夫(2004)『スタディ・ツアーのすすめ』岩波書店。

人見泰弘(2015)「異文化対応力の習得に向けて - タイ・スタディツアーにおける学習成果の事例から -」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』52(1), pp.167-182.

藤原孝章・栗山丈弘(2014)「スタディツアーにおけるプログラムづくり - 『歩く旅』から『学ぶ旅』への転換 -」『国際理解教育』20, pp.42-50.

DeWalt, K., & DeWalt, B. (2011). *Participant observation: A guide for fieldworkers* (2nd.ed). Lanham, MD: Altamira Press.

- Wenger,E.(1998). *Communities of practice: learning, meaning identity*. New York:Cambridge University Press.
- Wenger,E.(2010). Conceptual Tools for CoPs as Social Learning Systems: Boundaries, Identity, Trajectories and Participation. In C. Blackmore, (ed.), *Social Learning Systems and Communities of Practice*. pp.125-144. London: Springer.